

発行：熊谷市立江南文化財センター

## TOPICS

### 「彌生町屋台」を熊谷市有形民俗文化財に指定

平成 27 年 3 月 31 日、熊谷市教育委員会は、熊谷市文化財保護審議会（平成 27 年 3 月 19 日に開催）から、「彌生町屋台」を熊谷市文化財に指定することが適当との答申を受けました。このことについて建議し、承認されましたので、文化財指定が決定しました。

「彌生町屋台」は、市指定文化財のうち、「有形民俗文化財」の種別として指定され、同日の平成 27 年 3 月 31 日が指定日となります。今回の指定により、熊谷市指定文化財は 251 件となります。

「熊谷八坂神社祭礼行事」（熊谷うちわ祭）での巡行行事に参加する彌生町区の屋台は、大正 12 年 7 月から大正 13 年 7 月頃に掛けて、彌生町 186 戸・旧名の霞町 25 戸にて製作され、現在まで使用されています。市内で、完形で残存する最古の屋台で、長島力太郎らが製作し、しなやかな唐破風（からはふ）や均整の取れた構造が窺えます。関東を中心に活躍していた名匠、内山良雲（うちやまりょううん）親子の彫刻が屋台に施されており、前方の屋根下（破風下）には「素戔鳴尊（すさのおのみこと）」や「龍」、屋台内の前後を分ける脇障子（わきしょうじ）には「天岩戸（あまのいわと）」、下部に置かれた書院欄間（しょいんらんま）には「松に孔雀」、後方の屋根下には「松に鶴」や「波に親子亀」など多様な彫刻を見ることができます。（山下）



### 諏訪木遺跡にて新発見の出土品

4 月から、上之地内にある宗教法人一乗院地内での発掘調査を行っています。現在も発掘調査中であり、7 月中旬までの予定で実施しています。ここからは、弥生時代中期（紀元前 1 世紀）から近世（18 世紀）に至るまでの多様な遺構・遺物が確認されています。現在のところ主体時期は弥生時代及び中世で、全体の 8 割を占めています。

特徴的な遺構として、土坑から弥生中期に比定できる壺 3 点が長野地域に分布する栗林式土器の鉢とともに出土しました（右下写真）。壺はそれぞれが全体に細かな鋸歯文や帯縄文などの文様が施文されており、まさしく芸術品の代名詞といえるようなものとなっております。これまでにこれほどまでの形で確認されたことはなかったため、今後は研究者等を交えて検討していく予定です。（腰塚）



### 愛染堂保存修理事業

平成 27 年度、市指定有形民俗文化財「愛染明王」を収蔵していた「愛染堂」の保存修理事業が開始しました。愛染堂は江戸中期頃に建造された建物で、各所に意匠をこらした構造が特徴です。可能な限りの部材を活かした保存修理が見込まれています。仏像彫刻の美を有する本尊の「愛染明王」は、熊谷市下川上地区にて時代を越えて保存されてきました。江戸時代以降、「藍染」と「愛染」の関わりから、関東一円の多くの染物業者などが参拝し、額の奉納や修理工事が実施され、庶民信仰の文化遺産として残されています。現在、愛染明王は隣接する下川上自治会館に安置されています。愛染堂保存修理実行委員会では、かつての愛染堂を蘇らせるために、保存修理工事の具体的方策などの検討を続けています。（山下）



（写真は平成 26 年 6 月の愛染明王一般公開の様子）

## 市内遺跡発掘情報

### 平成 26 年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査について

市内上之では土地区画整理事業に伴い、事前に発掘調査を行っています。今回は、平成 26 年 11 月から平成 27 年 3 月まで実施した前中西遺跡の調査についてご紹介いたします。

調査は、遺跡範囲中央南部と北東部の 2 箇所で行いました。前者からは古墳時代後期（約 1,400 年前）の集落、後者からは弥生時代中期中葉（約 2,100 年前）から平安時代（約 1,200 年前）までの集落が見つかりました。後者で見つかった古墳時代後期の竪穴住居跡からは、祭祀具と考えられる独鈷石（どっこいし：写真）が完形で出土しました。独鈷石は縄文時代に多く見られるものですが、今回出土した独鈷石は、本遺跡の主体となる弥生時代のものである可能性が考えられます。（松田）



### 池ノ上遺跡の発掘調査について



この遺跡は妻沼地内の歓喜院の西側にあり、分譲住宅建設に伴い、平成 26 年 10 月から平成 27 年 2 月にかけて発掘調査を行いました。遺跡の主眼的な時期は、古墳時代後期後半（7 世紀）～平安時代初頭（8 世紀）の時期と中世～近世であり、大きく 2 つの時期に亘って展開されていました。

今回の調査箇所では、所々に腐植土と想定されるかなり黒色の粘質土を含む遺構が検出されました。これは、今後の検討を要しますが、この場所の地名が妻沼字池ノ上であることから「池ノ上」という字名の由来となった沼地、湿地帯のようなものではないかと推測されます。

また、調査では中世と想定できる土坑 2 基から馬骨が検出されました（右写真）。頭の位置が不自然な状態での検出であり、埋葬（埋納）方法について祭祀的な様相を示している可能性も含めて検討する必要があります。（腰塚）



### 前中西遺跡「個人住宅 2 軒の調査」

3 月に行った熊谷東小学校北側付近の発掘調査では、古墳時代後期（約 1500 年前）と奈良・平安時代（約 1200 年前）の集落跡を確認しました。遺構・遺物ともに少なく、集落範囲の南限かと考えています。

4 月に行った上之土地区画整理地内の発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴状遺構が 1 基と弥生時代中期後半の方形周溝墓とみられる溝跡を 2 条検出しました。完形で赤彩された小形の壺が出土しましたが、祭祀行為後に転落し埋没したものであり、遺構の時期を決定付ける貴重な出土状況でした。当該地点の南側に周溝墓群が確認されていますが、墓域がさらに北側へ広がることになると考えられます。（蔵持）



（写真：方形周溝墓と小形壺検出状況）

## 連載 くまがやの古墳群

### ⑩ 玉井古墳群 —実態が不明な古墳群—

玉井古墳群は、玉井地区の新时期荒川扇状地上に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。古墳群は東西南北に広く分布が見られ、以前は 15 基の古墳の存在が確認されていましたが、平成 20 年に範囲内容確認調査を実施したところ大半の古墳が古墳ではないことが判明しました。現在、古墳の墳丘と思われるものがいくつか残存していますが、それが古墳であるかどうかは不明です。

こういった中、国道 17 号線深谷バイパス建設に伴い発掘調査された新ヶ谷戸 1 号墳は、唯一実態が分かった古墳です。この古墳は、墳丘がかなり削平を受け正確な規模は不明ですが、直径約 15 m の円墳と推定されます。全長 7.7 m の川原石積みの横穴式石室内からは直刀（ちよくとう）・鉄族（てつぞく）・刀子（とうす）などが、石室前庭部からは須恵器フラスコ形長頸（ちょうけい）瓶（へい）・平瓶（ひらか）・ハソウ・坏（つき）、土師器坏（つき）が出土していて、埴輪は確認されていません。これらから 7 世紀前半の時期と考えられます。なお、この古墳は、北に離れ単独で所在しますので、同一古墳群を形成する古墳であるかは検討の余地が残ります。（吉野）

（写真：新ヶ谷戸 1 号墳 中央手前に横穴式石室が見える、1982『新ヶ谷戸』報告書から転載）



## 文化財センター通信

### ◇愛染堂奉納額・パネル展

江南文化財センターにて、特別展：『尾高惇忠筆「奉納額」 愛染堂「絵馬」・「奉納額」パネル展』を10月27日まで（平日のみ）を開催中です。

この額は、下川上の愛染堂に掲げられていたものです。額には「共進 成業 唯頼 冥護」と記されており、藍染業を中心とした業界団体から、愛染堂へ明治21年に奉納されたものです。筆は、世界遺産「富岡製糸場」初代工場長尾高惇忠（おだかあつただ・おだかしゅんちゅう：1830-1901）の号である「尾高藍香」によるものです。額の願主には、養蚕や藍玉の一大生産地だった現在の深谷市域の地名（明戸・上敷免・中瀬・血洗島・手計他）が記され、商売繁盛や業界繁栄の祈願を行っていたことがわかります。愛染堂修復後は元の位置に戻されます。貴重な機会ですので、ぜひご覧ください。（山下）



### ◇江南歴史探検隊来る！

平成27年4月22日、“江南歴史探検隊”と称した江南南小学校の6年生が江南文化財センターにやって来ました。生徒たちは、江南地区に伝わる伝統芸能の学習や、市内の遺跡から出土した土器などの見学を行いました。みなさん熱心にメモを取りながら学んでいた姿が印象的でした。皆さんも、文化財の学習を通じて、熊谷の歴史を学ぶ歴史探検隊になってみてはいかがでしょうか。（松田）



### ◇星溪園ガイドボランティア

熊谷観光ボランティアガイドの会（くまがい探偵団）による星溪園内の歴史探訪ガイドを実施します。市指定名勝「星溪園」の魅力を学んでみてはいかがでしょうか。（山下）

とき 毎月第2日曜・第4日曜 10時～14時（適宜説明）

ところ 星溪園（集合：星溪園正門） 費用 無料（予約不要）

問合せ 江南文化財センター 048-536-5062

当日問合せ 星溪園 048-522-9389

くまがい探偵団ホームページ：<http://kumagai-tanteidan.jimdo.com/>



## 文化財探訪

### 石橋供養塔 — 橋供養の歴史 —



埼玉県には、石橋供養塔が多く残されており、時期的には、大規模な新田開発が進んだ、享保年間（1720年頃）以降に造立されています。現在、熊谷市域には、16基余りの石橋供養塔が確認されています。

橋供養という儀式は近世以前から存在しており、著名なものとしては建久9年（1198）の源頼朝の橋供養があります。稲毛某の妻の冥福を祈った橋供養が催されることになり、頼朝は相模川へ出かけますが、帰路の途中で落馬し、それが頼朝の生命を縮めた原因だとされています。

石橋供養塔は、その石橋が長く無事であることを祈願して建てられたとされています。供養という言葉は、現在では冥福を祈ると同義語として使われますが、江戸時代には加護や感謝、さらには成就や記念という意味合いが強かったと考えられています。

写真（左上）は、広瀬地内の建てられているもので、道標を兼ねており、正面の「橋供養塔」の右脇に「右 八まん山」、左脇に「左ちゝふ」と刻まれています。安永七年（1778）11月造立です。写真（左下）は、上之の一乗院境内に建てられているもので、阿弥陀三尊の種子と「為二世安楽」「奉造当石橋七箇所」と刻まれています。将来の安楽を祈願して造立されたものと考えられます。（森田）

写真：広瀬地内石橋供養塔（上）・上之地内石橋供養塔（下）

## 文化財コラム 古代との遭遇・第16話『墨書土器について③』

今回は熊谷市内で確認されている墨書土器についてご紹介したいと思います。特に、同じ遺跡内で複数確認される同じ文字に注目してみます。一部しか記載しませんが、北島遺跡「綱（罟）」「土・土万」・籠原裏遺跡「西」・飯塚北遺跡「木」・諏訪木遺跡「木」・池上遺跡「中」・下田町遺跡「山」・鷓ノ森遺跡「山」・在家遺跡「西」等が特徴的といえます。研究者によると、集落内における集団の標識文字として特定の文字が使用されているとされており、これらの文字は、熊谷市内で確認された古代の集団の標識文字ではないかと考えています。仮に標識文字としますが、近隣の他の遺跡でも確認されます。具体的には、北島遺跡ではここで挙げた標識文字は全て確認されています。また、籠原裏遺跡では「西」が長期間使われた痕跡がうかがえます。これらの標識文字は、地域的広がりや時期差を検証することで、遺跡間のつながり、ひいては古代国家の地方政治のあり様の糸口がつかめるかもしれません。(蔵持)



籠原裏遺跡出土墨書土器・様々な字体の「西」

◇市政宅配講座で文化財を学ぼう。

(問合せ先：熊谷市広報広聴課 048-524-1156 または江南文化財センター)

講座名	内容
ようこそ「江南文化財センター」へ わくわく土器ドキ石器講座	文化財センター内の展示品・出土品について解説します。 市内の遺跡から発掘された現物の出土品を紹介しながら、熊谷の古代について解説します。
名勝「星溪園」を味わう 「伝統芸能の世界」今昔物語	名勝「星溪園」において、建物、庭園について説明します。 無形民俗文化財と地域の伝統芸能をDVD映像で説明します。
中山道をめぐる熊谷の歴史と文化財 熊谷歴史たてもものレビュー	中山道と熊谷の歴史的な関わりについて説明します。 文化財建造物について解説します。(国宝「歓喜院聖天堂」など)
指定文化財「絵画」への招待	文化財「絵画」について解説します。(華山・晴湖・恒友など)

### 編集後記

2015年5月、世界遺産委員会の諮問機関のひとつであるイコモス(国際記念物遺跡会議)は、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」を世界文化遺産へ登録する勧告をしました。それは国内の文化遺産が高く評価されたという吉報であると同時に、遺産を構成する建造物や史跡をいかに保存するかという課題が投げ掛けられています。

その当時の熊谷では養蚕や染物を始めとした新たな地域産業の開拓が行われており、その様子を今に伝える遺産が、富岡製糸場初代工場長の尾高惇忠が筆記した「奉納額」です。多様な産業が更なる進化を遂げようと、たゆまぬ努力が続けられていた熊谷地域でも、地域に根ざした独自の歴史・文化が育まれていたことが分かります。(山下)



発行：平成27年5月25日

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP:「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

文化財の紹介、ブログ「熊谷市文化財日記」、「BUNKAZAI 情報」カラー版などを豊富に掲載